

夢か、うつつか

夢の見方は十人十色。しかし、共同体で共有される夢のパターンもある。
人はなぜ夢を見るのか？
人類は夢を語り、描くことにどのような思いを託してきたのか？
夢と現実世界はどのようにつながっているのか？
脳科学、心理学、宗教学、文学、美術、民族学などさまざまな分野から、人類の夢路を辿る。

夢をみる／夢をかく

荒木浩 国際日本文化研究センター教授

夢を書く

初夢ということで、正月には、夢を特集した雑誌が目にとまる。昨年は『考える人』が「特集 眠りと夢の謎」と題して編集され、面白く読んだ。今年は、書店で『すばる』一月号を拾い読みしていたら、村上龍の「夢の記述」という掌編に遭遇した。
筒井康隆などは、心理学を学んだということもあって、かつて夢の記録を付けていると書いていた。村上も、二〇年以上も前から、夢の記述を続けているらしい。村上のこのエッセイは、自分の夢の記も紹介しつつ、その要点を簡潔に指摘していて興味深かった。人称がなぜか「ぼく」や「わたし」ではなく「おれ」になること。記述は現在形がふさわしいこと。論理や展開に飛躍や矛盾があること。どのジャンルの文学作品でもないこと。そして小説では決してやってはいけない、夢をただ「なぞる」かたちで記されること……。それ故に「夢は、おそらくわたくし自身に属していないのだ」と閉じている。村上の「ウナギとキウイパイと、死」という短編（『白鳥』所収）が叙述する夢日記を彷彿とさせる。

そこには夢の所有観をめぐり、中世の終わりを劃するという側面もある。問題は深い。
夢の日本化
わたしが当初興味をもったのは、フキダシの出る場所をめぐる日本の特徴である。日本のフキダシの発想は、中国版本の挿絵などからえているようなのだが、中国では、フキダシを頭頂から噴出させるのが定番である。ところが、『帝鑑図説』など、それを完全になぞつた日本の絵では、フキダシの先は微妙にずれ、後頭部の方に流れて描かれる。江戸時代の絵を見ると、夢のフキダシは、口・喉のあたりや、胸の辺にも散在する。その意味は、絵画史だけではなく、魂や精神の所在をめぐって、日本の信仰の問題と密接にかかわる。

夢と表象——国際的な拡がりへ

しかし、ひとたび比較文化的に眼を向けようとする、途方もない対象が広がっている。本誌が刊行される直前の二月に、ハイデルベルク大学で、アンナ・アンドレーワ氏の企画による夢と託宣をめぐる国際ワークショップに参加するが、発表題目を眺めると、人類学的考察に始まって、メソポタミア、エジプト、アラビア、ユダヤ、ヒマラヤ、古代中国、そして日本の古典文学や中世思想の夢など広範な地域を捉える。今回は発表者がいないが、母マリーヤが見たブツダ託胎の夢など、インドの夢もとりわけ重要である。
そもそも「夢学（oneirology）」は、夢という現象の解明に向けて、科学総体をかけてな



日本初の本格的夢研究の書、石橋臥波『夢』より（部分、資文館、1907年、国立国会図書館蔵）

わたしも、日本古典文学研究の視点から、夢の記述に関心を抱いている。たとえば中世には、四〇年以上にわたって記述された明恵（一一七三—一二三二）の『夢記』がある。現存する部分でも、三〇年ほどのときを数える。この驚異的な記録にも、まさに人称の問題があり、記述の非論理的飛躍となぞり、そして夢の他者性など、村上龍の体験と重なる要素が多く含まれる。『夢記』は「夢日記」とも呼称された。文学的な研究対象でもある。

夢を観る／夢を描く

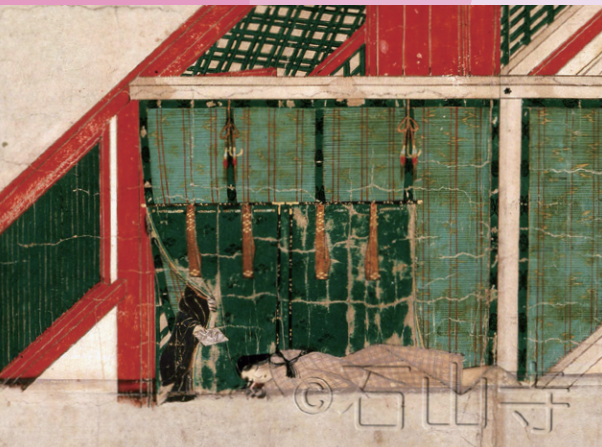
明恵『夢記』には、ときに印象的な絵が添えられている。『石山寺縁起絵巻』や『春日権現験記絵』など、日本中世の絵巻類にも、さまざまな夢の絵画化がなされている。一方で昨年、神谷之康氏らのグループにより、夢の



『風流十二季の栄花』第一図（国際日本文化研究センター蔵）

されるものだ。人文学においても、世界中におよぶ宗教と文化現象一般にかかわり、派生する問題は複雑である。英語圏でもまたの著作があり、非力なわたしにはそろそろ荷が重いテーマだとわかつている。せめて日本の独自性を俯瞰して、パトンを繋ぐ必要もある。そこで二〇一一年から、「夢と表象——メディア・歴史・文化」という、国際日本文化研究センターの共同研究会をおこなってきた。一四年度は、その成果を論集としてまとめるとともに、国際研究会を計画している。夢研究の潮流に、ささやかな寄与を遂げることがひそかに夢想するばかりである。

内容を科学的に解説する試みがなされたと新聞で報じられた。少し乱暴なまとめ方をすれば、夢の視覚化とは、古代から現代までを貫く、文化表象研究の重要なテーマなのである。
ところが中世の絵巻では、夢のなかと現実の世界とを隔てなく描く。うつつかりすると、場面の意味を見誤ってしまいそうだ。そこで夢を括弧で、夢見の人と結び付けるといふ描写法も必要となる。その特徴的な画像が、室町時代後期以降に頻出する、フキダシの夢である。
フキダシを含めた日本絵画史における夢の形象については、加治屋健司氏や三戸信恵氏によって、研究が大きく進展しつつあるが、フキダシという合理化は、いずれ夢を個人の脳裏に帰し、神仏の夢告や他者の想いの反映という、古代の夢の外部性をいっしょに排除す



『石山寺縁起絵巻』第3巻（重文、部分、石山寺蔵）。夢を見ているのは『更級日記』の記主、菅原孝標女。簾（すだれ）からのぞく僧侶の手は夢

二〇年ほど前、あるカウンセラーから、次に紹介する夢の解釈をめぐって意見を求められた。夢見手は高校一年の女子、主訴は通学電車での目眩めまいである。

「渦に飲み込まれそう。すごく怖い。でもなかには、理想的な世界が広がっている。」相反する想いが交錯しているが、夢であるだけに、矛盾し意味不明であるのも当然かもしれない。しかし何かのメッセージがありそうでもある。そのため夢は、古今東西、人びとを惹き付け、さまざまな解釈法が考案されてきた。そのひとつに、前世紀が始まる直前に誕生した深層心理学がある。

そこで右の夢を、まずはS・フロイト（一八五六―一九三九）、ついでC・G・ユング（一八七五―一九六二）の説に即して解釈してみた。

フロイト的な夢解釈

子どもは三歳ごろに性差を意識しだすと、異性の親への性愛的な欲動が生じ、同性の親には憎しみの念をおぼえる。そしてこの錯綜した感情や観念の絡まりは、六歳ごろまでに無意識のなかへ抑圧される。だがその後、さまざまな状況で意識に干渉してくる。いわゆるエディプス（エレクトラ）コンプレックスである。

この女子は、思春期にはいり、異性への関心が高まりつつある。だが今は、思春期特有の心身が不安定な状態のなかで、右のエレクトラ・コンプレックスが活性化している。そして異性の親に対する性愛的な欲動と、それに対する忌避感とが同時に発現し、そのはざまに葛藤している。つまり理想的な世界はエレクトラ願望が充足される状態を意味し、渦に飲み込まれることへの恐れは、願望を充足することへの忌避感の置き換えである。したがって、やがて現実の異性と出会うことで、今の状況から脱却できるであろう。

ユング的な夢解釈

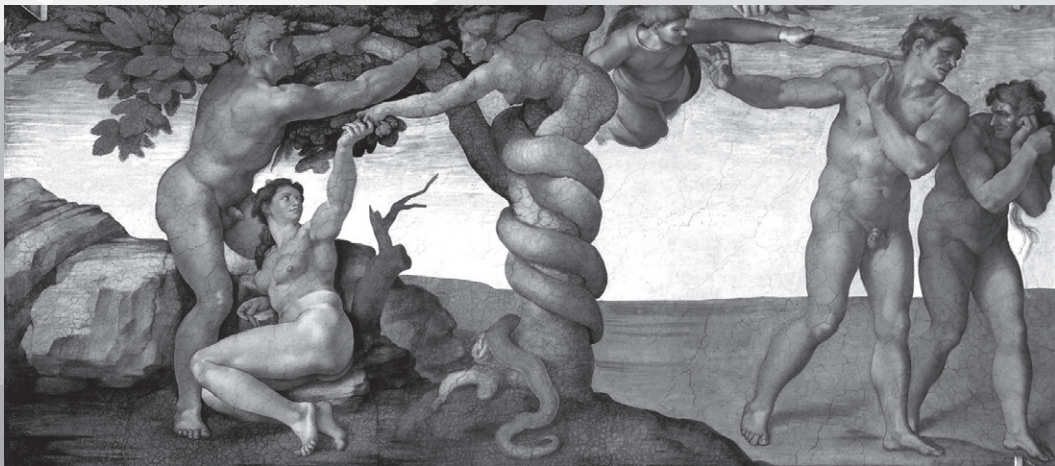
ではユング心理学的にはどう解釈されるだろう。

自我は、三歳ごろまでに萌芽的なものが形成され、三〇歳を過ぎたころ、一応

の確立期を迎える。そしてそれまでは、母的存在から、また自我の《母胎》であった無意識から「自立」しようとする力と同時に、そのなかへ「退行」しようとする力のあいだで揺れ動く。自立することは、それまで自分を包み込んでいた存在から離脱し、善悪・正否・好悪などさまざまなことを主体的に判断し決定せねばならない、苦しみの道でもあるからである。聖書をもちだすと、アダムとエバは、エデンの園であれこれ考える必要がなく、何の苦悩もなく暮らしていた。しかしまさに善悪を知る知恵の実を食べたため楽園から追放され、さまざまなことに苦しみながら生きる道が始まった。

あるいは新宗教の教祖の一人、北村サヨ（一九〇〇―六七）のことばを借りると、物事を知れば知るほど、つまり学問するほど、「我苦悶」して「陰照イナテリ」になってゆく。それゆえ学問など捨てて無我になれば、苦しみから救われる。

右の夢は、まさしくこうした「楽園回帰願望」をめぐる内なる闘いをあらわしている。すなわち《母胎》に戻って、自立に伴われる苦悶から逃れたい。だがそれは自分が無になる、自我が解体されることでもある。それゆえ怖ろしい。そうした葛藤状況である。



ミケランジェロがシステーナ礼拝堂に描いた天井画（部分）。知恵の実を食べたアダムとエバの楽園追放が描かれている

以上、フロイトおよびユングによる深層心理学的な解釈を試みた。それでは、どちらが「正しい」のであろうか。

平安時代の夢解き

改めて指摘するまでもなく夢は多義包含的 (polysemantic) であり、恐らくはどちらも「正しい」。さらには、昼間に生じた何らかの出来事が、この夢を形成したにすぎない、との解釈も成り立つ。さまざまな解釈が並立しうるのが夢の特性ということになる。

とすると平安時代の夢解きなら、冒頭の高校女子の夢をどのように合わせたか、つまり解釈したであろうか。それを夢想しながら、この稿を終わりにしたい。

光源氏の君は須磨の地にて、渦巻く波に憂い苦しむ違なごい目の日々を過すごされました。然しそのち榮華を極められました。姫さまも、ここしばらく違なごい目の日々におられました。ご体調の不例、渦に飲み込まれるような目眩のお苦しみです。でもこの御夢が示されたからにはご安心ください。違なごい目は過ぎ去り、これからご境涯が大きく開けること必定です。御夢は、姫さまが宮中に入られる、つまり入内いりなされることを、御仏みほとけが知らせ賜うたものに相違なごりません。



「源氏物語手鑑 須磨 一」土佐光吉筆（和泉市久保惣記念美術館蔵。「源氏物語手鑑」の重要文化財指定を記念した展覧会を同館にて2014年3月30日（日）まで開催。会期中展示替えあり）

見たい夢・見たくない夢

木村 朗子

津田塾大学教授

みんな夢のなか

「夢で逢いましょう」「夢で逢えたら」などと流行歌にあるように、想い合う恋人同士なら夢のなかできつと逢瀬を遂げられるといわれている。

うたた寝に恋しき人を見てしより

夢てふ物はたのみそめてき

(古今集)

小野小町の有名なこの歌は、うたた寝の夢に恋人を見てからというものの、夢でその人に逢うことをひたすら願うようになったというものがある。「思ひ寝の夢」ということばがある。心に思いつくことを夢に見るといふのなら、現代のわたしたちにも思いあたることであろう。しかし前近代の人びとは、思うことを自分の夢に見るといふだけでなく、深く思い詰めれば相手の夢のなかに自分がでてくると考えていた。

夢にても見ゆらんものを歎きつ

うちぬるよゝの袖のけしきは

(新古今集)

式子内親王のこの歌は、あの人の冷たさを歎いているわたしの様子はあの人の夢にも見えていようというものだ。もの思いをしなが眠りにつくと寝ている間に魂が体を離れて飛んでいって、相手の夢に姿をあらわすのである。では相思相愛の恋人同士の夢の場合、どちらの魂が飛んで行ったと考えたらよいのだろうか。

そんなことを詠んだ歌もある。

君や来し我や行けむ思ほえず

夢かうつつか寝てかさめてか

(古今集)

あなたが訪ねてきたのかわたしが行ったのかわからない。夢だったのか現実だったのか。寝ていたのか目覚めていたのか。

夢は告げる

自分の思いが自分の夢にあらわれるだけではなくて相手の夢にも出てきてしまおうとするならば、たとえば夫に隠れて浮気な恋をしているときなどはちよつと困ったことになってしまう。

『源氏物語』で夫の伊予介が留守のすきに光源氏と関係をもつた空蝉は「常はずくしく心づきなしと思ひあなづる伊予の方思ひやられて、夢に見ゆらむとそらおそろしくつつまし」として、気に染まない結婚相手に軽蔑さえしていた夫のことを思いやりながら、夫を思い出したばかりに夫の夢に出てしまうのではないかと心配している。

そのように考えるならば、わたしたちの夢にあらわれた出来事は、なにかを知らせてくれる夢告であり、神の託宣であり、仏神の化現する場でもあるということになる。だから夢はしばしば重大な予言となることがあり、夢解きに意味をといてもらふ必要があるのだし、もしよからぬ未来を告げる夢なら夢違えというまじないによって良い方へ曲げてもらわねばならない。

鎌倉時代に書かれた『我身にたどる姫君』という物語には、かつての恋人に胸を圧される夢



鼓を打つ巫女。「年中行事絵巻」巻3「闘鶏、蹴鞠」より(部分、田中家蔵、『日本絵巻大成第8巻 年中行事絵巻』中央公論新社、1977年より転載)

インド、移動民社会の夢見

岩谷 彩子

広島大学准教授

夢を語り合う人びと

インドに夢を語り合う共同体がある、という、ただでさえ神祕のイメージが強いインドに対するエキゾチズムを必要以上にかきたてるように思われるかもしれない。しかし、わたしがヴァギリ (Vagiri) という人びとと一緒に二〇〇〇年前後に南インドで生活し、日々耳にしたのは、まざれもなく彼らが眠っているときに見たという夢の話であった。

夢のお告げに対する信仰

インドには、夢のお告げを重視する文化が存在してきた。二〇一三年一〇月にも、ヒンドゥー教の修行者が見たという夢をきっかけに、インド北部で政府の考古学調査機関が約一か月間、金などの財宝を発掘しようとして試みニュースになった。残念ながら財宝は発掘されず、どうやら修行者に対するある政府の高官の信仰の篤さが高じた出来事だったようだ。この事例からわかるように、現在でもインドでは夢はお告げや予言とみなされており、夢がきっかけとなって神に仕えるようになる民間宗教者も多い。他方で、急速に市場経済化が進む今日のインドでは、夢を日常的に語ったりその意味を考えたりする機会はきわめて少なくなっている。

共同体をかたどる夢

これに対してヴァギリは、傍から見るとまったく取るに足らないような夢を日常的に語り合っていた。それはわたしたちが見る夢のように、何気ない生活の断片のような内容が多く、彼らと生活するようになるまでそれが夢の話であることもわからなかったほどだ。しかし、一九七〇年代ごろまで土地をもたず移動生活を送り、狩猟採集や行商で生活してきたヴァギリが語る夢は、変化に富み流動的な彼らの社会をまとめあげた役割を果たしていた。夢には、彼らが移動先で出会うさまざまな存在が登場する。夢にあらわれた「他者」の大半は、夢が他のヴァギリに語られる過程で彼らの氏族神とされ、神が空腹を抱え儀礼の実施を求めていると解釈されていた。土地をもたず社会のニッチに需要を見出し生計を立ててきた彼らにとって、「外部」の資源を「内部」のそれに転換することは、夢のなかでもおこなわれている。夢にあらわれる外部的な存在を彼らは自分たちの氏族神とみなし、儀礼をとおして社会秩序の核にしていく。ヴァギリにとって、「われわれ」と「彼ら」という共同体の境界はあらかじめ引かれているわけではない。それは常に「彼ら」との接触と交渉のなかで生起するものである。この移動民ならではの哲学が彼らの夢見の実践に結晶化されていたのである。

彼らと生活をともにするなかで、彼らの夢にわたしもたびたび登場し、わたしの夢にも彼らが登場した。覚醒時のみならず夢でも交渉を繰り返しながら、異質なものを取り込んで自己を作っていく。人類学的フィールドワークは、そんな核心的な営みでもあるのである。



野営中のヴァギリ(インド、タミル・ナードゥ州)



夢を語り合う

脳の信号から夢を可視化する

かみたに ゆきつぐ
神谷之康

ATR 脳情報研究所神経情報学研究室室長

できるわけがない？

数ヶ月前、フジテレビのドラマ『ガリレオ』を見ていたら、福山雅治演じる主人公の湯川が「脳からイメージを可視化するなんて今の科学でできるわけがない」と語るシーンがあった。わたしは苦笑せずにはいられなかった。というのも、「脳からのイメージの可視化」こそわたしの研究室が取り組んでいる研究のテーマであり、ちょうどその二週間前に、科学誌『サイエンス』に、脳から夢の内容を解読することに成功した論文を発表したばかりだったからだ。われわれの成果が世のなかで受け入れられていないことを残念に感じる一方、テレビドラマですら荒唐無稽と扱われるテーマを研究していることをすこし誇らしく思った。

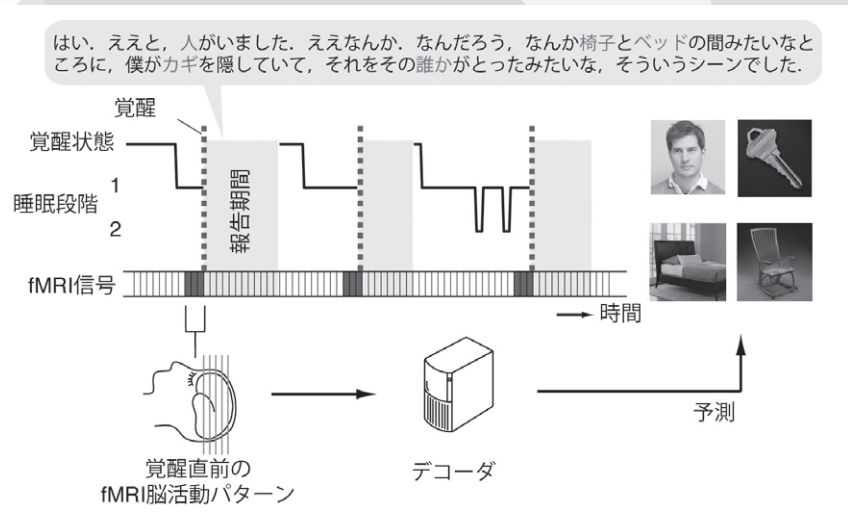
ブレイン・デコーディング

夢は主観的な現象であり、本人にしか体験することができない。夢を可視化するといっても、本人になり代わって体験することはできない。われわれのアプローチは、「どのような画像を見ているときに似た脳の状態にあるか」を調べることで、睡眠中の脳のデータから夢の内容を推測するものである。

そのために、被験者にまずたくさん画像を見せられて、そのときの脳の活動パターンをMRIという脳をスキャンする装置を使って記録する。このデータを使って、脳のデータから画像への「翻訳機」



「翻訳機」が解読した夢内容の例。文字の大きさと合成画像が、関連する物体のカテゴリーを表現



実験のプロセスをあらわした図。夢を見ているときに特徴的にあらわれる脳波を検出したら覚醒させ、夢の内容を語ってもらう。この手続きを繰り返す

を作る。この翻訳機の作成には、コンピュータにデータから自動的にパターンやルールを学習させる「機械学習」という技術を用いる。機械学習は、現在活発な研究が進められているコンピュータサイエンスの分野で、スパムメールの判別や音声や画像の自動認識などインターネットや情報通信に欠かせない技術である。この方法を使って脳の信号を解析することで、肉眼ではわからない微細な信号パターンから情報を抽出することができるのである。われわれのこのアプローチは「ブレイン・デコーディング」とよばれている。

夢の脳科学

夢は古来、その機能や内容の解釈について多くの人びとの関心を集めてきた。フロイトは夢を「抑圧された願望の充足」とみなし、夢の報告内容の解釈を精神分析の重要な手法として位置づけた。一方、一九五三年に睡眠中の急速眼球運動 (Rapid Eye Movement (REM)) の出現が発見され、REM 期間中に覚醒させると頻繁に夢の報告がえられることが確認されると、睡眠中の眼球運動や脳波など客観的な指標と夢の関係が議論されるようになった。

一九七七年にはホブソンらが、REM 睡眠中に脳幹からランダムに投射される

信号が大腦を活性化しイメージが合成されることで夢が生じる、とする「活性化合成仮説」を提唱し、精神分析的な夢解釈を激しく批判した。その後の研究から、REM や脳幹からの信号は夢見にとって必須の条件でないことが示されているが、近年の脳計測技術の進歩によって睡眠中の脳活動の詳細が明らかになってきた。

夢の機能の解明に向けて

では、夢は何のために見るのだろうか？ 危機的な状況に対するシミュレーション、記憶の定着と整理、情動反応の中和などさまざまな仮説が提案されているが、現代の科学はまだ明確な答えをもっていない。科学者の関心は、「夢の機能」よりも「REM 睡眠の機能」など客観的に扱える問題にあえてとどまっていたようにも思える。

夢の機能を理解するためには、夢の具体的な内容と脳や行動との関係を知ることが必要である。われわれが開発した夢の解読法は、元来主観的な夢の内容を客観的に扱うことを可能にする。これを用いて夢の機能を明らかにすることがわたしの「夢」である。

MRI装置。夢の解読に用いたもの



実験風景。MRIの制御室で脳波から睡眠状態をモニターしている